紙上討論 わたしたちの意見

毎日のように発生し、多大な損失を生じている火災。〝火のもとに注意すれば、火災は防止できる!〟といえばそれまでですが、常日頃、どんな心がけや備えをしていれば、無くすことができるでしょうか。そこで、今回は、「火災をなくすには?!」というテーマで、8人の市民の方がたから、火災防止対策上のご意見や、ご経験を、語っていただきました。

火災をなくすには!?

誰かが責任ある点検を

山口元子 31歳

(姥ケ山 会社員)

最近の火災は、新建材の採用もあって、必らずと言って良い程、死者を出しているようです。火災にあわなかったなら、まだまだ天寿を充分に活かす事が出きたのにと思うと死なれた方々が哀われて、それだけに火災という怪物のなせる威力に何度も恐しさを感じさせられます。

中には保険に加入しているから火災にあったほうが、もっかるなどと言われる方を耳にしますが、大変な間違いだと思うのです。

もらい火を受けた家は迷惑ですし、当人もまかり間違えば死へと継がるかも知れないのですから火事は絶対に出してはいけないのです。

私達は共稼ぎのために、常時、家をあける事が多いので火の元には特に注意をしなければならないと肝に銘じています。

留守にする際には、家族にも火を使用したか聞き、最後に私が点検します。

火災を防ぐには、何んといっても原因を作らない様にする事が根本。原因となる物を傍に置かない事。小さい子供への火に対する認識を植えつけたり、火を使用した人が消化に充分注意を傾け、責任をもって消化する事も勿論ですが、どなたかが、責任者となって寝る前や、出かける時には、火の使用を確かめ、再度点検するようにすれば火災を未然に少なく防ぐ事が出来るのではないでしょうか。

小さな故障でも修理を

高橋欽吾 56歳

(本町通十 地方公務員)

熱源や光源として火を使うことは、われわれ人類の祖先が、長い生活体験から開発した貴重な生活手段であることは、周知のことであるが、人類以外の生物は、火を利用することを知らず、太陽による自然の恩恵にあずかっているだけである。火災のもとである火は、このように人類だけがその利用を知る尊いものであることを銘記すべきである。

従って火を使用するのは人間だけであるから、火のある所には、必らず人がいなければならないわけであるが、火災の火元が往々にして、留守の家であったなどとは、全く不注意や油断からであろう。

最近の発火道具は、自動装置となり、また、燃料・道具も機械化している。機械化といってもごく簡単なもので、その構造や性能の詳細はわからなくとも、故障があれば素人でも、すぐ気がつく程度のものである。

小さな故障でも、発見した時は、その使用をやめ、徹底的に修理しなければならない。しかるに接触の悪い電気コタツやアイロンを放置したために生じた火災が多いのは一考を要することである。

要するに、火は尊いという考え方から出発して、これを大切に使用し、使用の終わるまで感謝しつつ、最後に消火することが、「火元に注意する。」ことに通じ、更には、火災予防の第一歩であると確信する。

火災の恐さ常に考えて

和泉豊作 68歳

(割野 農業)

火災の恐ろしさは誰しも身に感ずる事ですが注意については案外おろそかになり易いものです。よくいう盗人は担いだきりだが火事は金銀財宝みな灰になってしまうのです。

我家では電話台の前へ火事は一一九番、警察は一一〇番と太字に書いてはって万一に備えております。次に注意事項として、

一、やめようタバコの投げすて―吸殻はよく消し灰皿かゴミ捨てへ。寝タバコ止めよう。ことに酒酔が蒲団や畳を焼くことがある。

二、子供の火遊び注意―煙火は大人が監督する。殊に飛ぶ煙火は場所を選定する。マッチについては幼児がいじってつけることをおぼえ得意になってつけることがある。そして外へ持出し危険。あぶない事を良く教え子供の手の届かぬ所へ置く。

三、家庭では大釜大鍋で外か別の部屋で薪を焚く時、最後まで火所を離れるな。ガス石油コンロ電源は終わったら必ず元栓を締める。風呂は田舎では薪をよく焚く残火に注意、ゴミの焼却は良い場所で風のある時は絶対に焼くな、燃え終るまで場所を離れず。

四、暖房は過熱にならぬ様、寝る前外出時等完全に消火を確めて次の行動にかかる。

以上火の元に注意すれば火災は予防出来るとは云うものの仕事の忙しさに先を急ぎうっかりすることがある。家内協力して注意を払い火災防止につとめれば火事を無くすることが出来ると思います。

ひとりひとりの注意で

広川文代 26歳

(中山 主婦)

外出する時は私がストーブや電灯を消し、ガス栓をしめて戸じまりをし、もう一度おちがないか調べて安心していられるように出かける。こんなわずかな事一つでも、忘れて出かけるといつどんな事で火災になることもかぎらない。いつも家にいるときは近所で火災がおきたら、二人の子供をどうやってつれ出そうか、そんな事ばかり考えて万全をきしているつもりである。でもそんな私がある日、主人の実家でストーブのすぐ上でおしめを干していて乾いた物から取り込んでいる最中、そのストーブの火がおしめに燃えうつってしまった。それをみていた義母が大声で私から、おしめをとりあげ足でもみけしてくれた。その義母の行動力がすばやかった為、大事にならずにすんだ。そんな母に、私は心から感謝した。

もしその場が私一人であったら、火を見ただけでおちつきをなくしてふるえている私に、まわりは障子戸ばかり、きっと火の海となったであろう。いつも頭で考えているときは、おちついて行動をするつもりでいても、その場に直面するおちつきをなくしてしまう。そんな人が多いのでささいな事で終わる火災も、つい大きくなってしまうのではないだろうか。もっと一人一人が小さな事でも気を配って生活をしていたら火災なんておきなくてすむんではないだろうか。

火に対する緊張感恐怖感を忘れないで

竹田尚子 28歳

(関屋田町3 主婦)

新潟市に住むようになって約二年ですが、北国の冬は、長く厳しいだけに、火の使用期間も長く、使用量、種類も多く、人々の火に対する気持も慣れてしまっている事も有るのではないでしょうか?このような気持が、火災発生率に関係していると考えては如何でしょうか?自然に火に対する緊張感が出て来ると思うのですが……?。

昨年の二月、私の住んでいたマンションの近くで火災が有り、幸い夕方の七時頃でもあり密集していた二、三軒の民家が焼けただけで、私共の方までは、類焼はまぬがれました。

その時、私の気持に起きた類焼したら、と云う恐怖感は、火災をヤジ馬的気持で、外から傍観している限りは、理解する事は出来ないと思うのです。子供達にも、火災というよりも、火、そのものに対する恐ろしさという事を、良く教える必要も大切に思います。

石油ストーブの消火、ガスの元栓、炭火等の消化、灰皿の始末、電化製品のコンセントを抜く事等々、数え上げれば、私達の身の回りには、数々の火災の発生源が有ります。

個人個人が常に火に対する緊張感、恐怖感を忘れないでいたいものです。

「出かける前、寝る前には、めんどうでも、今一度、火の元の安全確認をぜひ実行する事を習慣づけましょう。」

人的原因が90パーセント強!!

渡辺道子 31歳

(小針 主婦)

火災のない町、健全な町、こんな町でありたい。しかし、毎日のように、火災が起きている。残念なことです。火災は起こるものではなく、起こすものだと思います。天災によるものは、別として、人的な原因によるものが九十パーセント強だと思います。〝大丈夫だろう〟が火災につながるもの。起こして泣くより、お互いに声かけて、防げるものなら、そんなに難しいことではないと思います。我が家では、新年早々に、消化器の薬のつめ替えを機会に、女性は器具には、弱いと頭からきめつけないで、実際に消化器を使って、屋外で、ためしてみました。簡単と口ではいうものの、実際に、使ってみて言えることだと思いました。泡沫消化器の場合、逆さにして、振ると、遠くまで飛ぶことが、わかりました。イザと、いう時に役立たずでは、消化器が泣いて、しまう。外出の時、夜やすむ前、皆で声かけて、火の始末は大丈夫?のひとことです。

人にいわれると、不思議と気にかかるもの。火災を起こしたら、私の責任だとまた確かめられずにはいられないものです。〝大丈夫だろう〟ではダメなのです。納得のいくまで、自分の目で確かめて、安心出来ることは、家を守り、身を守り、不安をなくして、精神衛生にもつながり、一挙両得です。お互いに、声かけて、納得のいくまで自分の目で確かめて、火災をなくしたいものです。

次回は 〝わたしの推せんする憩いの場〟

戸外で憩う季節がやってきました。しかし、「新潟市には緑が少ない」、「よそからきた人を案内する観光地が少ない」―という声をよく聞きます。

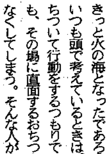
たしかに、新潟市は歴史的な緑の遺産が少なかっただけに、残念ながら事実です。

それは、今後の緑化行政に待つとして、緑や憩いの場が少ないなりにも、天気のよい土曜の午後や日曜などには、市内のあちこちに、家族連れで憩う姿が見受けられます。

そこで、次回は〝わたしの推せんする憩いの場〟と題して、みなさんのご意見を募集します。あまり知られていない〝穴場〟も大歓迎。推せん理由を意見としてまとめてください。

応募要領 四百字詰め原稿用紙一枚半(六百字程度)にまとめ、住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記し、市広報課(〒九五一 西堀通六)へ三月三十一日まで。無記名の原稿は掲載いたしません。掲載分には、薄謝進呈。

子供には具体的な指導を



橋本きそ子 33歳

(長者町 主婦)

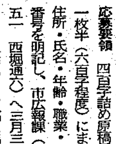
家ではマッチ一本いじったこともない保育園児の長男が、遊んでいた草原で、たまたま地面に落ちていた中味の入ったマッチ箱を見つけると、一緒にいた友達といたずらに及んでしまったことがありました。その一本のマッチが小さな火となって、近くの草原を焦がしてしまいました。

日頃、家では再三火の恐ろしさを教えていることでもあり、マッチ箱を見つけた瞬間はさぞかし驚きとまどい、恐れたに違いありません。しかし、幼児特有の冒険心はそれらを勝り、行為に走ってしまったようです。

家で実際マッチをすって、何か物を燃やしてみせたこともなくもちろん火災に遭遇したことのない子供にとって、それが観念的に危ないことを知っていても、果してその場に出くわした場合、判断できる力にはなっていないことを改めて知らされました。一本のマッチの小さな火がどのようにどうやって大きくなるのか具体的に知っている筈がありません。〝ストーブは危ないのよ〟〝マッチはいたずらしてはいけません〟と何百回い聞かせ、唱えてみても空念仏であっては何にもならないことをつくづく知らされました。

そのことがあって以来、子供の火に対する用心深さは実のものとなり、貴重な体験となりました。かといって好んで生きる体験でもありません。幼児、子供に対しては具体的に実際的に指導しなければならないことを痛感いたしました。

人間の本質的欠陥を是正



遠藤次雄 43歳

(米山西通 団体職員)

火災はなぜこうも起きるのか、もちろん社会的要因としては、消防体制の不備、劣悪な住宅事情、防火知識のPR不足など、さまざまな要因があげられる。それらは解決されねばならない問題であるが、同時に、人間自身に起因している面が、非常に多いことを忘れてはならない。火災発生の多く見られる傾向として、忘れっぽい、無頓着、慣れ、怠惰、発火性のものや危険物に対する無知、ガスや電気器具使用上の失敗などがあげられる。これらは人間だれしも持っているものである。故に、このいわば、いつ、だれに顕在化してくるともわからない人間内在の本質的欠陥の是正まで、鋭い英知の照射が加えられるべきである。また、家庭や職場では具体的に、①「火の元」を確かめる習慣を身につける。②ガスや石油などの使用に充分注意する。③防火処理をしたカーテンの使用、部屋の中の整理。④消火器や消火バケツ、非常口や避難バシゴやロープの準備。⑤消火や避難の仕方、通報の手順や方法など実際の訓練を通して体で覚える―等の配慮や心構えが必要になってくる。

防火への関心や防火意識は、家庭や職場から隣り近所、地域社会へと広げられる一方、他方で個々の人間生命の内まで拡大され、定着していかねば、火災をなくすことは不可能であると私は思う。